◎琉球新報　2016年03月28日　朝刊22面　記事数：1/1　<1/1枚>
希望この手に　沖縄の貧困・子どものいま－第２部（１３）　若年出産　中学生で母、生活のため高校中退

希望この手に
沖縄の貧困・子どものいま

第2部 ⑬

若年出産

中学生で母、生活のため高校中退

支援者「長期見守りを」

中3の時に長男を出産した女性。知識も情報もなく、子育てを母親に任せてきた。今は、3児の母親として子どもたちに向き合っている

本島在住の女性(21)は、中学3年生で長男を生んだ。長男の父親とは結婚せず、その後に知り合った別の男性と2人の子を持ち、今は家族5人で生活している。女性は「子育ては大変。お金のやりくりも難しい。長男の誕生日に何もあげられなかった」と肩を落とした。

長男の父親は同い年だった。妊娠を伝えた時、この男性は「2人で頑張ろう」と出産に前向きだった。だが、出産してしばらくすると、他の女性と付き合っていると分かり、別れることになった。

女性は出産後も進学を諦めず、同級生より1年遅れて定時制高校に通った。公的支援など知らず、長男を母親に預け、生活費を稼ぐため昼間はコンビニなどで働いた。ある時、友人に誘われてスナックの仕事に就いた。友人たちとわいわいするのが楽しく、何より時給2千円超が魅力だった。次第に仕事にのめり込み、学校を休むようになった。

仕事はスナックからキャバクラへと移った。「風邪が全然治らなかったり、体がだるかったりして、無理していると感じることもあった」と振り返る。親が世話してくれる長男と接する時間は減った。学校に行く日も減り、退学した。

現在の夫と交際を始めて約3年。2人の子どもが生まれ、昨年結婚した。しかし、甘い結婚生活というわけにはいかない。「長男が夫に慣れず、夫が長男に厳しい。けんかになることもある」と話す。若い夫婦の生活は、手探り状態だ。

◇　◇

出生率が全国一高い沖縄では、この女性のように10代で出産する割合も全国一で推移している。2013年の人口動態統計で見ると、全出生数に10代の出産が占める割合は県内で2・5%。全国平均1・2%の2倍に上り、全国一だ。沖縄大学福祉文化学科助教で社会福祉士でもある砂川恵子さんは「沖縄では、新しい命の誕生は喜ばしいと、10代の出産を容認する傾向がある。家族や親族、友人に同じように若年で産んだ経験を持つ理解者がいるという特有の現状がある」と推測する。

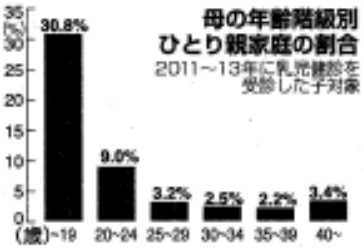
一方、親を取り巻く状況は厳しい。乳幼児健診を受診した幼児を対象に家族構成を見たところ、10代の親がひとり親家庭である割合は30・8%で、およそ3人に1人。県の15年完全失業率では、15～19歳が18・2%で際立って高い。

砂川さんは「10代で出産すると学業を中断し、専門的知識や技術を身に付けられず、正規職員として働くことも難しい。生活を維持すること自体が厳しくなる」と指摘する。

「若年の親の子育てには家族の力が大きいが、家族の支援には限界がある。相談機関による支援や子育て費用などの公的助成、地域住民も関わることが必要だ」と話す。

糸満市の「子育て応援隊NPOいっぽ」は、若い親に寄り添った支援をしている。みそ汁の作り方や子どものあやし方、制度の情報まで、きめ細かく対応する。副会長の玉城米子さんは「根気強く声を掛けて、困った時に連絡してもらえるような関係を目指している。長期間、見守る必要がある」と話し「各地域で同じような支援が提供されるようになってほしい」と訴えた。（子どもの貧困取材班）

（随時掲載）



情報やご意見をお寄せください。
文化部生活班 ☎098(865)5162　社会部 ☎(865)5158
seikatu@ryukyushimpo.co.jp
FB「チームいしがんとう」で発信中